

## 研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-133	13-115	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
<b>題名 (原題/訳)</b>		
Driving after drug or alcohol use by US high school seniors, 2001-2011. 米国高校上級生における飲酒後および薬物使用後の運転行為 2001-2011		
<b>執筆者</b>		
O'Malley PM, Johnston LD.		
<b>掲載誌</b>		
Am J Public Health. 2013 Nov;103(11):2027-34. doi: 10.2105/AJPH.2013.301246.		
<b>キーワード</b>		<b>PMID</b>
飲酒運転、違法薬物、高校生、マリファナ		24028266
<b>要 旨</b>		
<p><b>目的：</b> 米国の高校上級生における飲酒後または薬物使用後に運転をする頻度、またその状況にある者が運転する車への同乗経験の頻度を調査すること。</p> <p><b>方法：</b> 高校上級生を対象とした年次調査である <b>Monitoring the Future</b> のデータを使用した。2001年から2011年まで計22,000名以上のデータが得られ、ロジスティック回帰分析にて飲酒・薬物使用後の運転と背景因子との関連を分析した。</p> <p><b>結果：</b> 相当数(2011年次対象者においては約2割)の高校上級生が、飲酒後あるいはマリファナ等の違法薬物の使用後に運転行為をしていた(またはその同乗者であった)。年次推移をみると、飲酒後の運転行為は減少傾向であった一方で、マリファナ使用後の運転行為は増加傾向にあった。5杯以上のアルコール飲料摂取後の運転行為割合に比べ、マリファナ使用後の運転行為割合がより高値であった。このような危険行為のリスクは、人種・居住地域等の記述的背景因子との関連はみられず、無断欠席や夜間外出等の生活習慣的因子との有意な関連がみられた。</p> <p><b>結論：</b> 青少年の違法薬物使用後の運転を撲滅するためには、より強い介入が必要である。</p>		